

新刊紹介

星の百科

草下英明著

(社会思想社, 現代教養文庫, 242 頁, 240円)

この本は同文庫中の「星座の楽しみ」の続編として書かれたものである。「星座の楽しみ」との重複を避けながら執筆しているので、この本だけでは少し物足りない記述もある。やはり両書を通読し、2冊を並べておくべきであろう。

著者は文学の造詣が深く、軽妙な筆致で書かれている楽しい本である。内容も「天文学の本流からはかなりはずれた、いわゆる傍系天文学の見本のようなもの」と著者自身がいているように肩のこらないものである。

人工天体打上基地の話から始まり、惑星、衛星、流星雨、昼間見える星、食、星の進化、特異星、星うらないと続く。その中で著者は天文学者の長命くらべをやったり「星物園」という新語を作ったりしている。

この本の後半に、全体の三分の一を占める分量で、星を扱った詩や文学についての記述がある。ホメーロス、ドストエフスキーから日本書紀、志賀直哉など60に達する作者と作品が紹介されていて、著者が新しいジャンルの開拓と自負し、「ひそかなるライフワーク」としている物の「一部をごく軽い読物」として書いたものである。たしかに著者の意欲と広い研究には敬服するし、興味や関心のある読者には面白くてたまらないものであろうが、この本に盛り込むには分量が多すぎた感じがする。思うに、この部分はこの本から抜いて、別に星の文学とでも名づけて一冊の本にすべきであろう。星の百科という書名からみて(著者は百花繚乱のヒュッカに近いと書いているがそれにしても)、「乱雑ごたまぜに書きこまれる」には詩と文学の部分が重すぎた感じである。

こまかい所で気の付いたことを列挙する。20頁水星の近日点移動が「公転方向に対して西まわり」というのはわかりにくい。66頁指南車は「磁石による方位計」ではなくて車輪と歯車による方位計である。85~86頁昼間見える星の中に人工衛星落下も入れてよいのではなからうか。ただし、人工衛星落下を流星の中を含めるのなら別であるが。149頁マッカーサーがたてこもったのはコルヒドール島ではなく、コレヒドール島 Corregidor I. であって、コル・ヒドラエ Cor Hydrae とは関係はなさそうである。213頁南部めくら暦の説明がない。左のページに絵解(えとき)は出しているが、めくら暦そのものの由来や解説がないのは惜しい。

135~159頁星の名を並べる順序は星座のラテン名の

アルファベット順のようであるが、そうでない部分もある。それに肝心のラテン名が出てないので、星の名をさがす手がかりがこの本自身の中にはない。星の名の並べ方に一考を要する。

結論として、この本は楽しい本である。特に前半は文句なく楽しいが後半は楽しく読むためには読者に興味や素養が必要である。(土田嘉直)

宇宙とはなにか

宮本正太郎著

(新書版, 講談社, 246 頁, 290 円)

表紙カバーにある射手座の宇宙雲および“宇宙とは何か”というタイトルからは、一見非常にスケールの大きい、あるいは非常に遠いところの話が中心であると想像されがちであるが、本書の内容は、第1章をのぞいて地球から一番近い天体である月、および地球の両隣の惑星である火星、金星に関するところで占められている。そのうちでも特に、宇宙の神秘を解くカギとして、月に焦点を合わせているようだ。

まず、第1章は、この本の主題である第2章以下の話に入る前に——つまり対象を地球のごく近傍の天体に限る前に——もっと広い視野から見た宇宙全体の姿をざっと見ておこうという意図から、星座の起源・恒星の宇宙・宇宙のはて・過去の世界・恒星の生涯・惑星系の誕生についてそれぞれ簡単な記述があり、この本全体の序論となっている。

次に、第2章では、地球からはその大部分を直接見ることのできない月の裏側のロケットによる写真撮影の話から始まって、クレーターの名前に関するエピソード、月の自転と地球のおよぼす潮汐力の関係、アバタ論争(クレーターの成因についての隕石説と火山説の対立)、月が生きていることを裏づける種々の月面での現象、地球とのアナロジーによるマントル対流と大陸移動などが、興味深く平易に書かれている。ただ、月の自転に関する説明で、現在月は全く自転していないと誤解されるのではないかと思われる表現があるのが少し気にかかる。

第3章は、月への道と題して、月ロケットによる月探査の成果が歴史を追って述べられている。まず、レインジャーによる塵の層がないことの確認と、溶岩の流れた跡の発見、続いてサーベイヤーとルナによる月面軟着陸が成功し、月面の石の性質などがわかってきたこと、孫衛星オービター号による広範囲の写真撮影が行われ、それによって、月のより詳しい地形が得られたこと、マスコンが発見されたこと、そして最後に、アポロ宇宙船による月着陸の成功とそれに伴う多くの成果が細かく述べられている。

最後の第4章の内容は、惑星ロケットの原理の説明、

マリーナ号とヴェネラ号の観測に基づく金星の世界、そして古くから運河や極冠で有名な火星の世界の紹介である。

以上、本書の内容を大まかに紹介したが、全体を通して写真や説明図が非常に多く採用されており、(ほとんど、一頁に一つの割合) また、ゴジラ君が何度も登場したりして肩がこらずに楽しく読むことができるよう配慮されている。なるべく多くの人々が科学に興味を持ち、かつその新しい成果を知ることは、科学の底辺を上げ科学の発展の一つの重要なファクターとなるが、本書はその立場からの本として一応その目的を達していると思われる。(湯浅学)

日本の暦

岡田芳朗著

(木耳社, B6判, 394頁, 1,200円)

天文学関係の本は毎年かず多く出版され、この欄でも毎号紹介されている。然し暦に関する本は比較的すくない。暦関係の適当な本は?と尋ねられても現在すぐ入手できそうなものがなくて困ってしまう。このような時、本書が出版されたことは大変喜ばしい。

従来の定評のある暦の本は、いずれも天文畑の人によって書かれた自然科学史として、暦法の発生・発達に重点がおかれている。

本書の著者は文科出身であり、現在女子美術大学で歴史の授業を受持っておられる。それ故に本書は、暦が民衆のなかにどのように生きて来たかという、暦と社会とのつながりにウェイトのおかれている暦の文化史である。

改暦前の太陰太陽暦では、毎年、各月の大小、つまり或る月が30日あるのか、29日なのかは暦が発売されるまで一般には分らない。月の大小が分らなければ、毎月末、即ち晦日(みそか)に清算する習慣になっている勘定の受渡しの日が分らずに困って仕舞う。この為にも、月の大小だけは何を措いても知っておく必要があった。この一年間の大小の配列を示す為に大小暦というのがあった。これは一枚の紙に毎月の大か小かを、適当に絵や歌の中に織り込んで、判じ物のようにしたもので、その絵や歌にかくされたアイデアの巧拙を競うのである。江戸時代、貞享・元禄の頃より当時の知識階級に流行したものである。いくつかの写真によって、この大小暦が例示されているのを初め、貞享の改暦と西鶴・近松、あるいは暦の茶室、各地の暦、キリシタン暦、更には元号の始行と、従来の暦の本には書かれていなかったことに

多くの頁がさかれている。

岡田氏は勤務の休暇を利用しては、南は石垣島から北は東北の寒村へと、丹念に史料をもとめて旅をし、話は沖縄暦からアイヌの暦にまでわたっている。

更には、著者が永年にわたって調査されて来た明治改暦の項を読めば、今、人々が何も感ずることなく使用している太陽暦への改暦が、民衆の立場を無視して、どのように強引に行なわれたかを知って読者は驚くことであろう。

正統的な(?) 暦の本に語られなかった、これらの多くの興味深い話を読んで、この本が誰かの「一冊の本」になって暦学に興味を持たれる人が出ることを期待して、一読をおすすめする。

ただ、実際の太陽年の長さとして 365.242218... 日としているのは少しく違し、平均期望月の 29.5305882 日も昭和35年以前の理科年表の値である。

(内田正男)

雑報

NGC 5253 星雲に超新星出現

カリフォルニア工大の Mr. C.T. Kowal は NGC 5253 星雲 ($\alpha=13^{\text{h}}37^{\text{m}}1$, $\delta=-31^{\circ}24'$) の核から 56 秒角西, 85 秒角南の位置に光度 8.5 等の超新星を 5 月 13 日に発見し, 15 日に確認した。この超新星は銀河系外星雲に出現した超新星では、観測史上 4 第番目の光度である。なお NGC 5253 星雲には、1895 年に光度 7.5 等で観測史上第 2 番目の光度の超新星が出現している。本年の超新星は、アジアゴ天文台の Dr. R. Barbon と F. Ciatti によるスペクトル観測によると、タイプ I の超新星で、極大光度は 5 月 4 日頃であったらうとのこと。(香西洋樹)

(192 頁よりつづく)

科学者 1 名を含む) が設置された。

4. 国際学術交流について

国際学術交流、とくに日中学術交流の強化について、学術交流委員会と原子核特別委員会から、それぞれ提案がなされたが、審議の結果、日本学術会議の国際学術交流五原則を確認した学術交流委員会の原案に、朝鮮民主主義人民共和国との学術交流強調と、学・協会等の意見もきき、日中学術交流は、学術会議が中華人民共和国の中国科学院を相手として促進に努力し、中華人民共和国を国際学術団体に加盟させるための努力をほらうなどの点を加えた修正案が多数で可決された。